1362
22/
112

繪入正教大意

前編

明治卅五年

特 18
694

イサイヤ 水島行楊 編述

前編 信仰の教

ストース正教大意

明治三十五年一月 新刊

大日本正教會編輯局

明治三年

ごとわりがき

本冊子は分て二編となす。――信仰の編と替行の編である、――共に教ひの教を學ぶ者の入門として、も幼童の讀本とするつもりであつたけれども、それには、も少し活字を大きくせなければならず、挿畫もも少し豪華になるべく多くした方が實益ありと想ふた。ところがなか〳〵それらの故障と其他の事故に因てもでも早速に目的を遂ぜられない。そこで途中からつもりを變て獨り幼童ばかりでなく大人にも一般に初學の人に對する布教用とした。故に卷中の書方は、餘り柔かな所もあり強ちかゝ硬いような點もあり、一向一定してゐない且つなるべく簡短を主として我が國この頃の聽教者と初進の信者に必要なと認むる箇條だけを稍詳くした。どうで書物ばかりで濟む者ではない、傳教に從事する父兄が活ける言の說明を要する所が少からぬだらう。字音の餘調はなるべく普通の聲の通りにした、それは余が目的とする讀者は、敢て虛飾的死文學を以て幼童や凡人を苦しむる夫子ではおいからを。

み、ら、識。

繪入 ハリストス正教大意 前編

目次

結論。ハリストス正教の趣意。……一

本論。信仰の教――正教の教理について。……三

〔第一章〕信仰と上帝のこと。

第一回 信仰のこと。……三

第二回 上帝の本性について。……四

〔第二章〕上帝は造物主と照管者たること。

第一回 神靈世界の創造。……九

第二回 物體世界の創造。……十一

第三回 人が造られたこと。……十四

第四回　人が罪に陥ッたこと。……十五
第五回　三位一性のこと。……二十一
第六回　上帝の照管と定制。……二十四
第七回　聖書と聖傳のこと。……二十五
〔第三章〕上帝は救世主と審判者たること。
第一回　上帝子イヽスヽハリストスのこと。……二十九
第二回　上帝子救世主の降誕。……三十
第三回　上帝の母童貞女マリヤのこと。……三十二
第四回　救世主が十字架に懸られたこと。……三十五
第五回　ハリストスの復活。……三十九
第六回　主の昇天。……四十一
第七回　審判者としての主イヽスヽハリストス。……四十三

〔第四章〕上帝は成聖者たること。
第一回　上帝聖神のこと。……四十九
第二回　教會のこと。……五十三
第三回　七件機密のこと。
第一件　洗禮。……五十五
第二件　傅膏。……五十九
第三件　聖體。……五十九
第四件　痛悔。……六十三
第五件　神品。……六十七
第六件　婚配。……六十八
第七件　聖傅。……六十八
〔第五章〕上帝は成全者たること。

第一回　人間の成全、――復活。……七十一
第二回　全世界の成全、――光榮の國。……七十三

以上。

緒論

ヘリストス正教大意　前編

緒論

ヘリストス正教の趣意。

ヘリストス正教は、真の上帝の教であります。何人でも真の人となりたいならば、斯の真の上帝の教に就かなければなりません。真の上帝とは何であるか、真の人となるとは如何なることであるか、此は獨り我らの主イエスス ヘリストスが明かに教へてくださったところであります。故に斯の教を「ヘリストス教」と申します。而して斯の教は世の中の人の考へ出した説と異ッてすこしの間違もない全く正しい教であります。故に又これを「正教」と申します。

さて我らが真の人となるとは如何いふことであるかと尋ねてみるに、先づ其靈魂を罪の中から救はれて上帝の愛の中に棲むことであります。この上帝の

愛と我らの救ひといふことは、最も大切なことで、人として若もこれを享けることをせずに只此世のはかないことにばかり迷はされてあつたならば、とても人の人たるかひはありません。されば何人か上帝に救はれたいと思ふならば、――真の人となりたいと思ふならは、――速かにヘリストスの正敎について、その敎ふるところに從はなければなりません。

これで我らが靈魂を救はれて上帝の愛の中に棲むことを願ふには、何が必要であるかと申すに、一ばんに正しい信仰とそれに伴ふ善行であります。聖書には、此二つが共に必要で救ひの爲めに孰れを缺でもならぬといふことをくはしく錄されてあります。（マルコ福音十六の十六、エゼレイ十一の六、及びマトフエイ七の廿一、イアコフ二の十二參照。）故に今余は茲に正敎の大意を述ぶるについて、篇を前後の二つに分けて前に信仰の敎、次に善行の敎を申し述べましやう。

上帝造物主

本論——信仰の教、——正教の定理について。

〔第一章〕信仰と上帝のと。

『我信ず、惟一の上帝父、全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を』。（信經の第一條）

第一回、信仰のと。

抑信仰とは、何様なものであるかといふとは、聖書の説く所に依るに「信仰とは、望むところを確認し、まだ見ないところをたしかに證據するとである」（ヘブライ十一の一）斯様なふしぎな作用が人のたましひにそなはってあればこそ、人は、目に見えぬ上帝のことをさとり又神靈世界のことを知ることができるのであります。若も信仰といふ作用がなくて、只智慧と肉眼だけの見る所の外、何も眞理とすることができなかったならば、我らは甚だ不幸なものとなります。何故なれば肉

眼で見える、とは限りがあります、如何なる智慧も、上帝と神靈界のことを其試驗にかけるような器械は持てゐませんから。されば上帝の特別啓示なるハリストス教が、たましひの救ひを願ふものに一ばんに信仰を促したのは、もっとも當然であります。

ろこで上帝を信仰するとは、どのように信ずるのであるか、といふことをこゝに確めてわかねばなりません。それは上帝の有ることと其本性とはたらきはどのようであるといふことをその特別の啓示通りに信じ又彼が人人を救ふについての言と其事業を確かに承認めることであります。（エウレイ十一の六、エフエスス三の十六、十七、參考。）

第二回、上帝の本性について。

さて上帝は必ず有るべきものといふことと大かたどのようなものであらうかといふことは、人が只天地萬物を觀ただけでも、よく考へてみればあらまし想像ができますが、上帝の特示なる教に依てみれば、それよりも確かにはっきりと分ります。勿論此世に在て我ら罪人が充分に上帝のことを知貫くことはできませんけれども特示なる聖書には、人の智慧と信仰の力に應じて上帝のことについて明されてゐることが左の如くであります。

（第一）上帝の本性とその有ることについては、全く形も姿もない（口繪に上帝を老翁の形に描いたのは其生命長きことを象ったのです。）即ち神靈で（四の廿四）先づ御自分から有るので、誰にも造られたものでない、何者から生れたのでもないといふことです。舊約聖書に上帝が自ら『余はエゴワである』と仰せられたお言は、（エギペトを出る記三の十四）即ち『自ら有る者』の意味であります。かくてこそ彼は萬物を造り人に生命をたまふこともできたのです。

次に上帝は永遠なるもの（聖詠八十九の三）即ち始もなく終りもなく全く時間の外に立つもので、今の時間は、其初め世界と共に上帝がお造りになったものであります。彼は永遠であるから、又死ぬることもない、（前六の十六）その生存は限りなき

始めから何時までも續いて有るもので、全く活通しであります。永遠といへば又變るともない、我ら人の心はぐら〳〵と毎度かはるのは珍しくもないぐらゐですが、上帝に於てはすこしのかはりもない。聖書に『彼には變りもなく還移の影もなし』と曰てある通りであります。（イアコフ一の十七）

上帝の在る場所についていへば、彼は全く在らざる所なきものであります。（聖詠百卅八の七から十まで參考）決して或一ヶ所に限られて居るといふことはない、それは限りなき神靈であるから。もツとも教の中に特に上帝が「天に在す」とか「聖堂においでになる」とかいふことのあるのは、そこに上帝の光榮が特別に顯はれ及び彼れの恩寵が著しく臨むことを申すので決して彼はそこだけに在て外はお留守になるといふわけではありません。

〔第二〕上帝の生命とはたらきについて申せば、先づちゑは睿智で、とても人のようにだん〳〵に進歩してゆくのでなく、はじめからもはや此上はないといふ高きちゑである。而して彼は全知と申して過去と未來の別なく現在のことはりにこれを知てゐられます、又人の心の底まで知貫き其他何事でも何物でも暗も晝のように明かに知ッてゐられいでになります。（ロマ十六の廿七、エウレイ四の十三）

次に上帝の意旨と其はたらきを申せば、其固有は全く善と仁慈でこのかゝやく善德と仁慈は、その世界を造り給ふたことに於て、殊に人を救ひ給ふことに於て限りなき愛として顯はれてゐます。（聖詠百四十四の九、及び百四の九）

彼れの意旨には、又至聖と公義といふ本質が有て、全く其まゝに動かすとのできない法をなしてをる。（レビト十一の四十四、ペートル前書一の十五、十六、及び聖詠百四十四の十七、ロマ二の十一、コリンフ前三の八）彼は又誰からも造られない上帝として限りなき全備の自由を持てゐられます、そこで何でも御意のまゝに自由自在に行ふてすこしの間違ひもない。（エフエス一の十一）又全能と申して如何なことでもできぬことはないといふ大なる能力を持てゐられます。（イオフ四十二の二）

かの全く何もないところから驚くべき世界萬物をお造りになッたのは即ち

この全能の顯はれであります。もっとも何なとでもできるとはいへ、惡いとか無理なとはできません、なぜなれば その本性が全く善で眞理の上帝であるから。若も惡いともできるとか無理なとでもするような上帝であったならば、これは全能ではない、却て無能であるといはねばなりません。丁度健全な人には病氣は必要でなく、もしも病氣があったならば、それは健全な人ではなく、却て、病人であるといはねばならぬようなものであります。

〔第三〕上帝の境遇について申せば、彼は惟一でこの上もない尊い光榮とこの上もない福を持てゐられます。眞の上帝は、獨一であります、決して二神があるべきものでない。（復傳律例六の四、マルク十二の廿九、）只ひとりばかりといへば、何か人間の考へを以てすれば、只さびしくてたいくつするばかりで何の福も樂もないように思はれるかも知れませんが、そこは上帝樣です上帝樣には上帝樣の奥義が有て限りなき福に滿ち限りなき本性の善を樂んでゐられます。（テモテフェイ前一の十一、六の十五、）

〔第二章〕上帝は造物主と照管者たること。

前申した通り上帝は御自分獨りで福に滿ちてゐられます故、決して外に何かがなくて足らぬとか困るとかいふことはありません。けれどもそのはかられぬ仁慈と光榮はいよ〳〵ゆたかにして乃ちこゝに別段な生物と世界をお造りになりました、それはいと福なる上帝は御自分から惠みを他の物にも授けてやりたいと思召すが爲め又御自分の光榮の爲めであります。

第一回、神靈世界の創造たること。

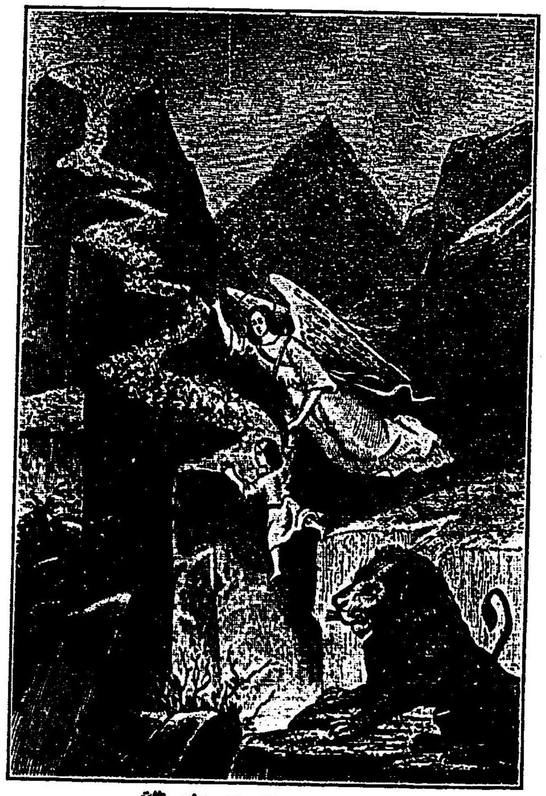
〔其一〕善なる神靈即ち天使のこと。

最初に上帝は、形のない生物即ち普通に天使と稱ふる高等な生物をこれ造りになりました。（創世記一の一、及びイオブ廿八の七、參考。）即ち我らの目に見るとのできない神靈の世界で、勿論何も無かったところから上帝の全能力を以て彼天使らを有らせたま

ふたのです。彼らは各〳〵上帝から善美な性とさとき智慧と自由の作用を賜はッて ふしぎな光の輝く神靈の國に其造物主を讃歌ふて永遠の樂みを享くるものでありました。彼らの員は甚だたくさんでありましたが、大別して三段と九品の區別があります。第一段は、セラフィム、ケルヴィム、賽坐、第二段は主制、權柄、能力、第三段は、首領、天使長及び天使で、都合九品であります。彼らの中に別に「守護天使」なる者があります、次の繪は其を象ッたのです。

〔其二〕惡なる神靈即ち惡魔のこと。

彼の多くの神靈は其自由を善く用ひて上帝の恩寵に依り皆善に確定したけれども、他の一部分の神靈は、其自由を餘り我儘に用ひ自分から不注意にして己が智慧に慢心を起し大膽にも己が大恩主たる上帝に叛いて惡魔となりました。彼と共に墮落した同類も、ずいぶん數あったようです。（イヨダの六、マルク五の九、其他。）彼らの名は又サタナ（敵）とも鬼とも邪神とも申します。



聖天使の守護

第二回、物體世界の創造たこと。

神靈世界が出來上ってから次に上帝は目に見ゐる世界をれ造りになりました、それは今我らの棲んでをる地球とその他の物體世界であります。

斯世界萬物をた造りになったのには、六日の順序を以てせられました。その最初に、やはり何も無いところから上帝は物質の原を有らせられたのですが、其時分は只茫として暗の中の水のような何とも定った形をなさぬありさまでした。それを、上帝はふしぎな神靈の覆ひと全能のた言を以てだん〳〵に開成してゆかれたのです、先づ（創世記一章に詳。）

第一日には、光の素を造り給ひ、

第二日には、大空を造り給ひ、

第三日には、陸地と水を分けて植物と鑛物を、

第四日には、太陽と月とれはくの星を、

第五日には、水族と空に飛ぶ生物を、第六日には、陸地に棲む動物即ち野獣と家畜と昆虫を造り給ひ、終に神霊と物體といふ二つのものを兼備ふる人間をお造りになりました。

斯て第七日は、そのはたらきを休てこれを安息日と定められました。

次に掲げた繪は、右の第一日の出來事で、上帝が全能なるお言を以て『光あれ』と仰せられ乃ち光が出來たところのようすであります。元來目に見えない上帝を見えるように描いたのは、形ある人間の作した繪としては致方のないことであります。

光あれ——第一日

第三回、人がつくられたこと。

以上天地萬物は、皆上帝の一言を以て造られたものですが、萬物の靈たる人間が造られたのは、最も念が入てをります。それは他の萬物に於ける場合のように只一言ばかりでなく、上帝はいと丁寧に『我らは人を我らの像と肖に依て造るべし』と仰せられ而して上帝は手づから地の土を取て人の身体を造り其面に生氣を嘘込でこれを生きた人間となされました。それから上帝は彼れを地堂といふ樂しい花園に入れてたくさんな菓と殊に生命樹といふ一ぱんありがたい賜をおくだしになってこれを養はれました。これは即ち世界に於ける一ぱん初めの男で其名をアダムと申します。その後上帝はアダムの寢てゐる中に彼れの身体から別な人間をお造りになりました、それはエヲと名づけられて又一ぱんはじめの女でありました。（創世一の廿六、二の七、八、廿二を讀め。）全世界の人間は、皆この二人から出て殖えたのであります。

こゝに上帝の像と肖と云ふたのは、象りの語でその意味は人のたましひの中のことに在ります、即ち眞理を知り善を愛し其貴重なる自由の賜をよく用ひて永遠の福に進むところの性と作用を指して申したのであります。（エフェス四の廿四、其他參考）

萬物は善美なる上帝に造られたものであるから、皆善美でありました、其中で殊に人間は一ぱん善美なものでした。靈魂には麗しさ智慧と潔さ心と自由を備へ身體も至極健全で美しく共に永遠に活きて、限りなき福樂を享くべきものでした。決して今のように惡いとや病氣や災難などは微塵もなく、勿論死ぬるといふことはなかったのです。そうであるのにその後の世界のありさまはなかなかそうでない、これは如何いふわけであるか次にお話し申しましやう。

第四回、人が罪に陷ッたこと。

初め上帝は元祖アダムを地堂に入れてこれに一つの誡命をお授けになりま

した。それはこの園の中に只一本『其菓を食ふてはならぬ』と禁じられた樹が有て『若もこれを採て食ふたならば死ぬる』といふことを仰せ聞かされました。其名は『善惡を分ける樹』と稱へられて、若も人がこれを食はずに上帝の命令を守ってゐたならば、いよ〳〵善に確定して前に在った天使のように至福な地位に進むことができるのでした、アダムもエワもひりにこの一本だけの樹菓を食はずとも、外に許されたたくさんの樹菓と殊に『生命の樹』といふ一ばん味ひのある食物があったのです。それに人はなほあきたらずしてこの禁じられた樹の菓を食ふことに因て上帝の仰せにそむき、はじめて罪を犯し惡といふことを知る不幸な地位に落るのでありました。故にこの樹は自由ある人の爲に善と惡を知り分ける大切な境でありました。

上帝に造られたもののために、その意旨の自由といふ作用は、貴重なものでした、人はこれによって萬物の靈たるたふとい地位に居ることができるのでした、ところが元來自由のとですから只一方にばかり往くより外できぬといふわけのものではない、右に往くともできる左に往くともできるのが自由です。そこで惜いかな初めの女(エワ)はこの自由を善くない方に用ひて蛇の言を信じ彼の誡めの樹菓を採て食ひました。(創三の一から六まで)茲に蛇と申すのは、惡魔が人を誘ふアダムもついにこれを食ひました、のみならず夫なるアダムにも與へ、ふためにこの道具に使ふたのでありました。

斯の通り人は自由にして惡魔の誘にかゝり、上帝の法律を犯したのは、即ち罪と名くべきいやなものが(創三の四、)世界に出來た由來であります。上帝の言は決して違はない、乃ち人は死ぬべきものとなりました。上帝のたは汝に因て詛はれる』といふてありますが(創三の十七、)これは人が上帝にそむいたに因てその惠みを失ひ地上にいろ〳〵な苦勞と災難がでてくることを申されたのです。且つ今まで病も悲みも全く知らなかった人は、俄かに病氣が出來、さま〳〵な

かなしみ なやみ の 後 ついに 身体は 死んで 朽って しまふ、これだけでも 禍で ある が、まだ ひどい 禍は たましひの 死ぬると です、もとより たましひは からだの ように 死ぬる もの では ありませんが、こゝに たましひの 死ぬる といふのは それが 上帝から 離れて この世では 罪と 慾に 己れを 傷め のちの世では 永遠に 苦む ことを 申すので あります。

只アダム と エワだけが 罪を 犯した のに 後の 子孫まで 詛はれた 地に 居て 死なねば ならぬ のは、如何いふ わけ か』と たづねる 方も あります。それは アダム エワと 我ら 子孫と、決して 別々な 人間の ような 無關係 で なく 世界中の 人は、みな 彼から 血を うけた 子孫で あれば 丁度 川の 源が 濁れば その下まで 濁りが 流れる ような もの です、それに 只 元祖の 罪ばかり では ない、子孫たる 我らも 銘々に 罪を 重ねて をります。この 元祖から 遺傳したの を 原罪と いひ、我らが 自分で 犯したの を 自作罪と 申します。

『生命の樹』と 福なる 地堂は、罪人の ために は、もはや 不適當と なりました。故に 上帝は 元祖 二人を 地堂から 逐出して、人が 復『生命の樹』に 近づく とが できない ように ヘルワイム と 焔の劍を 以て これを 防衛られました。（創三の廿二から廿四まで。）

次の 繪に 見ゆるの は、此處を 示した もの で、アダム、エワの 後に 立つ 天使と 焔の 劍は、もと 目に 見えぬ もの で すけれども、これは 事柄の 意味に 依て 見える ように 象ったので あります。

元祖の遥斥

第五回、三位一性のこと、

全知の上帝は、人が罪を犯し不幸に陥ることを先に知てゐられました、けれども これを造ることを止されなかったのは、もとより造物主の大權に屬することで、特に人は罪を犯すけれども復悔改るといふことをも先に知てゐられました。故に上帝は彼れを造るのに少しも差支はありません。故に上帝は彼れと凡ての罪人の爲に世の創始から其獨生子を以て救主と定め救ひの道をお立てになってゐられました。このことについては、先づ上帝の秘密教の奥義たる三位一性のことについて概畧お話申しておかねばなりません。元來上帝はその本性に於ては、もとより只獨一です、けれども その個位に於ては三つあります、すなはち父と子と聖神です。これは三つとはいへ決して分れてしまふとはなく、何時も惟一つの本性に一所にゐられるのです、けれども又三つ混同になってしまふと い

ふことはなく、各その位の特別な性質を以て共にしてゐられるのです。上帝父の特質は他の位から生れたのでもなく發するのでもなく、乃ち自ら至聖なる泉であると、上帝子の特質は永遠の先に父から生れたと、上帝聖神の特質は、永遠に父から發することであります。

斯の三つの位は、この中で決してどれが尊くてどれが卑しいといふ階級はありません、又上帝子が生れたとか聖神が發するとかいふても、皆これは永遠の先時間といふ始めがない前のことであるから、決して上帝父が先に在て子と聖神は後から出來たといふわけのものではありません。三つの位とそれはじめなき永遠なる一性の上帝であります。

昔し上帝が三人の旅人の形をかりてアウラアムといふ義人に現はれたことがありましたが、これは既に舊約の時代に於ても、彼三位なる奥義を信仰の大なるものに示されたのです。（創世記十八の一から十五迄に詳。）その時のようすは次の繪

至聖三者

に描てあります。

斯の奥義を尚明かに示されたのは、新約の時代になってからで、我らの主イエス、ハリストスによってです。主の御身が聖前驅イオアンから洗禮をお領になつたときに、上帝父は天から聲を以て聖神は鴿の形をかりてそうして上帝子は自ら人の身を取てすなはち主イ、ス、ハリストとして世に現はれ給ふたことでした。(マトフエイ三の十六、十七、)

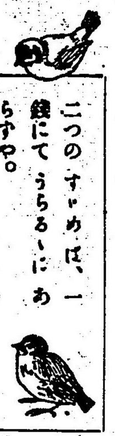
其後主は尚明かに三位の名を擧げて御門徒らに『汝らは往て悉くの民に教を傳へて、彼らに父と子と聖神の名に依て洗禮を授け』ることを仰せられました。(マトフエイ廿八の十九、)

上帝の三位のことは、聖書に確かに敎へられてありますが、我らが限りあるちゑに分ってしまはふといふことはむづかしい、けれども自分の靈魂のようす(心と言と生氣が三つの作用にして一つに歸する)について考へて觀れば、強ち得

心ができぬでもありません。

第六回、上帝の照管と攝理（定制）のこと。

上帝は世界をお造りになってから、後其世界に關係して決して何も爲さぬといふことはありません。人間でさへも普通の心あるものは鶯のように其子を生棄にするものはありません。況や至仁至愛の上帝に於て、世界を遺棄になさるわけがないといふことはなはだ明かな道理でしやう。上帝造物主は又照管者であります。彼は世界をお造りになってからこのかた、一秒時刻の絶間もなく、その全能の力と睿智と仁慈の聖旨を以て全世界に關係し、殊に人間に關係してその預備する所の目的に向ふように其生存と理法について佑け護ってゐられます、勿論惡は助けないが、それが改められる限りは改めさせて善に向はせ愈々惡い者も之を制限して害を無限に及ぼさぬ樣につかさどってをられます。こ



のような作用を名づけて上帝の照管と申します。主イヽス、ハリストスのお言にこのことを明して『我が父は今に至るまで作し我も亦作す』と仰せられ、（イオアン福音五の十七）又凡そ受造物の實体と能力について其保護の行屆いてゐることを、『汝らの父の旨がなくては一羽の雀も地に墜ちず……汝らは多くの雀より貴し』と仰せられてあります。（マトフエイ十の廿九、廿一）上帝の照管の中で特別に人人を永遠の生命に導き給ふ作用に付ては、聖書にこれを『救の（定制若くは）攝理』と名づけられてあります。（エフエス三の九）若も上帝のこのような作用が無かったならば、世界は一寸も此儘で存在ができません。（聖詠百三の廿九）

第七回、聖書と聖傳のこと。

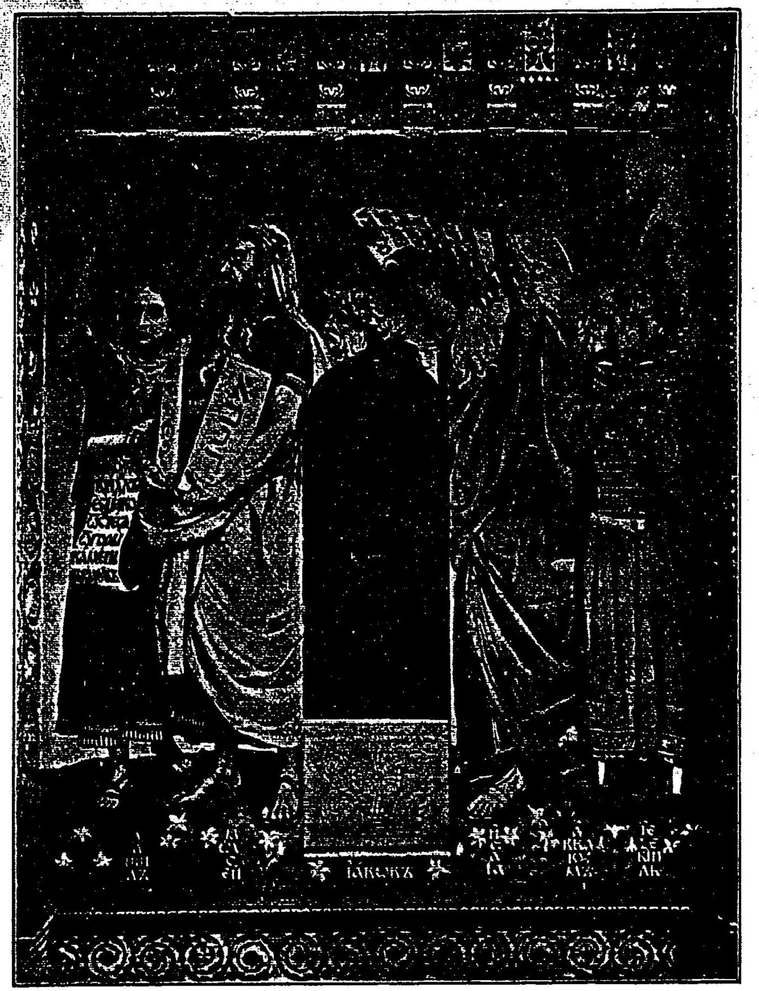
以上お話申した上帝のことと以下お話申さうとする上帝の教のことは、特に

上帝の啓示といふことに因る者であります。啓示とは、人が正しく上帝を信じて救ひを得られるように、上帝のことを人が上帝に敬事ふる其理を、人に啓き示されたことであります。この啓示は舊約の時には、元祖アダムを始め、義人ノエ、アウラアム、大豫言者モイセイと其他の預言者らにたまはり、新約に至っては、最も明かに上帝子イ、ス、ハリストスに因て充分にたまはり、且つその御門徒と聖使徒らを以て弘く天下に傳へられました。（エウレイ書一の一、二）

此に因て上帝の啓示を錄した聖書は、舊約と新約の二部に別れてゐます。舊約には、世界の創造たことから大約五千年間の歷史と敎道と殊に多く救世主のお降りになることについての預言を書いてあります。新約にはこの預言が成就して既に救世主がお降になったと即ち福音のと世界の終りまでの大切な事柄が書いてあります。

其前にまだ「聖傳」といふものがあって、これは上帝の啓示を受た人が列祖以來代々言を以て其聖旨を傳へたもの。聖書は、つまりその傳への中から特に保存の必要に因て聖預言者と聖使徒らがこれを紙に書付たものです。故に聖使徒は、我らに聖書と共に聖傳をも固く守るべきことを命じてをります。（フエサロニカ後書二の十五、）

次に挿んだ二枚の繪は舊約聖書の中に著しい義人と預言者らです。大預言者モイセイ、列祖イアコフ聖詠の作者ダヰッド、舊約の福音者と呼ばれたイサイヤなども見えてをります。それらと其他畫中の人物について一一の話は茲にできませんから、聖歷史を讀んでごらんなさい。



諸預言者

●ルイニダ●イセイモ●フコアイ●ナイサイ●ムクヲウア●リイキセエイ

諸預言者

●聖王ダビデ●ソロモン●預ナウム●イエレミヤ●イザヤ●聽訟官ダニエル●

〔第三章〕上帝は救世主と審判者たること。

第一回、上帝子イ、ス、ハリストスのこと。

『又信ず、一つの主イ、ス、ハリストス、上帝の獨生の子、萬世の先に父より生れ、光よりの光、眞の上帝よりの眞の上帝、生れし者にて造られしに非ず、父と一体にして萬物彼に造られ、』（信經の二）

前に人間が罪に陷たのは甚だ不幸であったけれども、惡魔はさに深く陷り過ぎたのではなかった、故に限りなき仁慈の上帝は、我ら人間を罪と滅びから救ふためにその至愛なる獨生子を斯世におくだしになりました。主イ、ス、ハリストスは、すなはち上帝の獨生子で上帝父と同じく尊い眞の上帝であります。

『イ、ス、』とは、グレチヤの語で世を救ふ者といふいみで、これは、上帝の子が至聖なる童貞女マリヤの身に宿りたまふときに天使長ガウリイルに由て傳へられた名であります。『ハリストス』とは油つけらるゝといふいみで昔ユウレイの

民が上帝の預言者の訓へに依て救世主のおくだりになることを待て居た時分に稱へられた名であります。昔エウレイの國で頭に淨き油をつける禮は、上帝聖神の恩寵を授けられる表るしで、預言者司祭長及び帝王になるものには、各〻斯禮を行はれてありました。けれども その人の性に聖神の恩寵を充分に滿被つて只一人の御身にこの三つの重大なる職を兼有て居られたのは、只主イヽスヽヘリストスばかりでありました。

第二回、上帝子救世主の降生。

『我ら人人の爲め、又我らの救ひの爲めに天より降り、聖神及び童貞女マリヤより身を取り人と成り』（信經の三）

人間の救ひの爲にいと尊ぶ上帝の子が特に世におくだりになったのは、救ひの事業は世界を創造るのと同然の大事業で、全能なる上帝の外、とても いくら高等の天使長でも他の如何なる受造物でも出來ないからであります。

上帝の子も上帝としては在らざる所なきものであるけれども、それが救ひの爲に天からくだりになったと申すのは、前にも天地に在たけれども地に於ては形を以て見ることはできなかったのに、今度は人の身体を取て目に見える形で地上に現はれたまふたからであります。（イオアン三の十三、參考。）斯く人の救ひの爲には、上帝子自らも人の身体を藉らなくてはなりません。

上帝子救世主の至聖なる降誕は、今を去ること大約一千九百一年前イウデヤのヴレエムといふ小都會でありました。彼の降誕はもちろん全世界の救ひのためで その救ひは凡そ彼を信じてたのむものを罪と詛ひと滅びから贖ひ助けるためでありました。

彼上帝子は古から今まで尚今から後までの悉くの人間のために罪の贖ひをなすのであれば、自分は無論罪があってはなりません、けれども若し通常にアダムの子孫であれば、どうしても原罪の遺傳を免れません。そこで彼は通常の法で

なく即ち別段な法を以て聖神の作用に因て夫のない童女すなはち至聖至淨なるマリヤから身體を取りて人となられました。（ルカ一の廿七、廿四、廿五、二の七、イオアン一の十四、）

茲に上帝の子が人體を取ったのは、實際に『人となった』ので、たましひとからだを備へてをるとは、全く普通の人のとほりで、只そのちがふのは、少しも罪といふものがなかったとであります。そこでイヽスヽハリストスは完全な人で又完全な上帝でありました、彼れの一個位にはたしかに上帝と人の二性がいと親密に合はされてありました。かくてこそ彼は上帝と人の中保に立て、人を上帝に和睦されることができたのであります。（テモフェイ前二の五、）

第三回　上帝の母童貞女マリヤのこと。

至聖なる童貞女マリヤは、義なる太祖アウラアムと聖王ダヴィッドの子孫の中で敬虔なるイオアキムとアンナの女でありました。彼女は兩親の善行と自分の戒慎に因て一身を上帝に獻じ生涯潔き童貞を以て生活するとの誓ひを立てゝ

ゐましたが、この非常に敬虔なる性行は、大に上帝の恩寵を招き聖靈に滿たされて、ついに上帝の子を生むに堪へられた程なたふといお方であります。故に正教會は特に生神女といふ尊號を上つって彼女をヘルヴィム、セラヴィムの上に讃揚ります。生神女とは聖福音經にある『主の母』といふのと（ルカ一の三十四、）同じいみであります。

上帝の母

第四回、救世主が十字架に懸られ給ふたこと。

『我らの爲にポンテイ ピラトの時十字架に釘たれ、苦みを受け葬られ』（信經の四）

上帝と人なるハリストス救世主は、たはせいの人の救ひの爲に、預言者若くは教師として人人に上帝のことを教へ罪人に悔改を勸め、たくさんな善行と奇蹟を行はれましたが、ついに司祭長として御身を上帝の羔として十字架を祭臺として大なる贖ひの祭りをさゝげられました。

頃はイウデヤが既に獨立を失ふてローマの羈軛を受けてをる時でした、即ち異邦人なるポンテイ ピラトといふ太守がイウヂヤの政治をなしてゐる時、主イオス、ハリストスは、その反對派なる僞教師と惡黨の爲に誣告を受けて、自らは一點の罪なさりっぱな御身を以てひざんにも死刑に定められ、イェルサリムの城外なるゴルゴフといふ丘の上で十字架にれ懸りになりました。而して實際に至極の

苦みを受けたしかに死んで葬られ給ふたのです。

其苦みを受けたり死んだりしたのは、むろんイエスの人の性ばかりで、上帝の性ではありません、但上帝の性は主イエス、パリストスのお生れのはじめから死んで後までもそのたましひとからだに共に在て、如何なる場合にも別れることはありません。主の人の性が死んだときはからだとたましひは別れたのです、けれども上帝の性と人の性はどちらにも別れるとはありませんでした。すなはち主の墓の中に上帝の性は主の死骸と共に在り、主のたましひは上帝の性と共にして地獄に下り魔軍を打破って古の義人らのたましひに救ひを傳へ彼らを天國に携へられました。

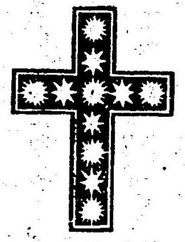
パリストス救世主が十字架にかけられたのは、他の強力に迫られたために餘儀なくされたのでは、ありません。主は上帝の愛子として自ら欲するならば、如何なにしてでも、惡敵を打滅ぼして無難に免れることができます。けれども この苦みと死は、實に萬民の贖ひのためにせひ受けなければならぬ父の御意であったから彼上帝の子は甘んじてお受けになったのです。（イオアン十の十七、十八、マトフェイ廿六の五十三、）

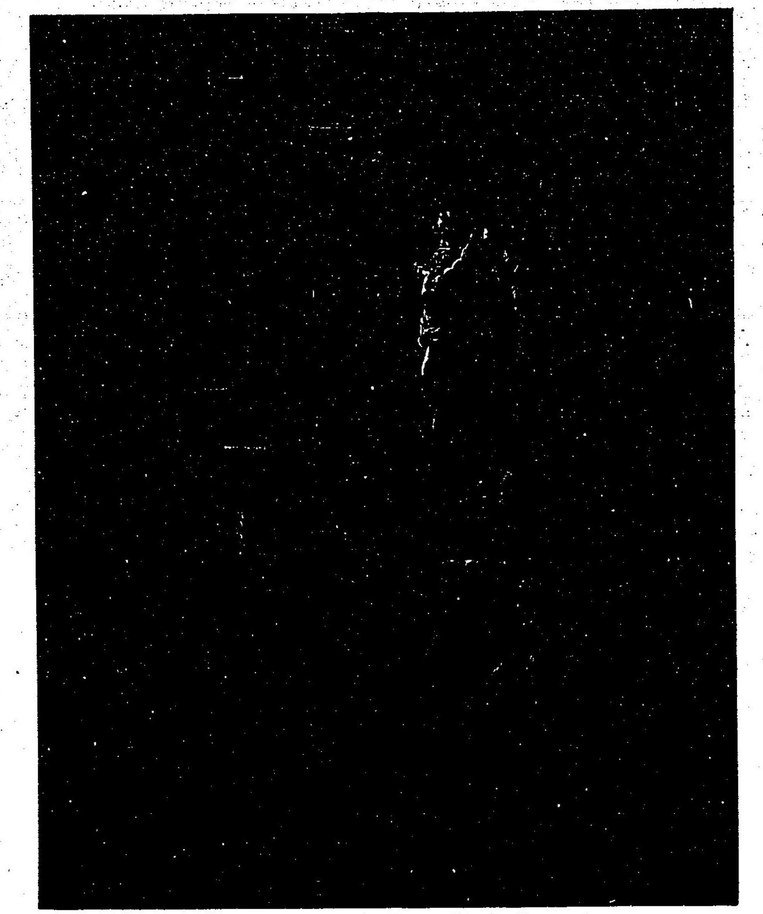
救世主が十字架にかゝりになった時、共にその右と左にかけられた二人の盜賊がありましたが、左のは、なか〳〵兇徒で、他の惡黨と共に主を嘲りました。けれども右の盜賊は、この臨終の際に殊勝にも今までのことを悔いて主に憐みを願ひました。故に彼れのたましひは主に助けられて其日の中に天の樂園に入ることができました。（ルカ廿三の廿九から四十三まで。）

さて限りなき大仁慈の上帝は、其獨生子を世にたまふて我ら罪人の爲に救ひの道を立てゝくださった程に人を愛したまふことは、我らは此上もないありがたいことで感謝にたふる言もありません。罪なき上帝の子が斯程までに苦み死んで立てられた其功德は實に無量洪大であれば、如何なる罪人も斯救世主に依て赦されないといふことはありません、又如何に公義に固い上帝も其愛子の立てた

大功德に因て滿足されぬといふことはありません。

我らハリステアニンが常に主の十字架を尊み、特に禮拜其他の時に右の手を以て額から胸に引き、右の肩から左の肩に引て十字架を畫いたり、又小さな十字架を頸にかけたりするのは、この尊くして生命を施す十字架のいみを記念して萬事其功德に依るべきことを忘れない爲です。そも我ら罪人は決して己れの力に依て眞實の生命があるものではありません、只十字架の上なる上帝の子を信ずるに依て生きられるのです。（ガラテヤ二の二十）





上帝子の死

第五回、ハリストスの復活。

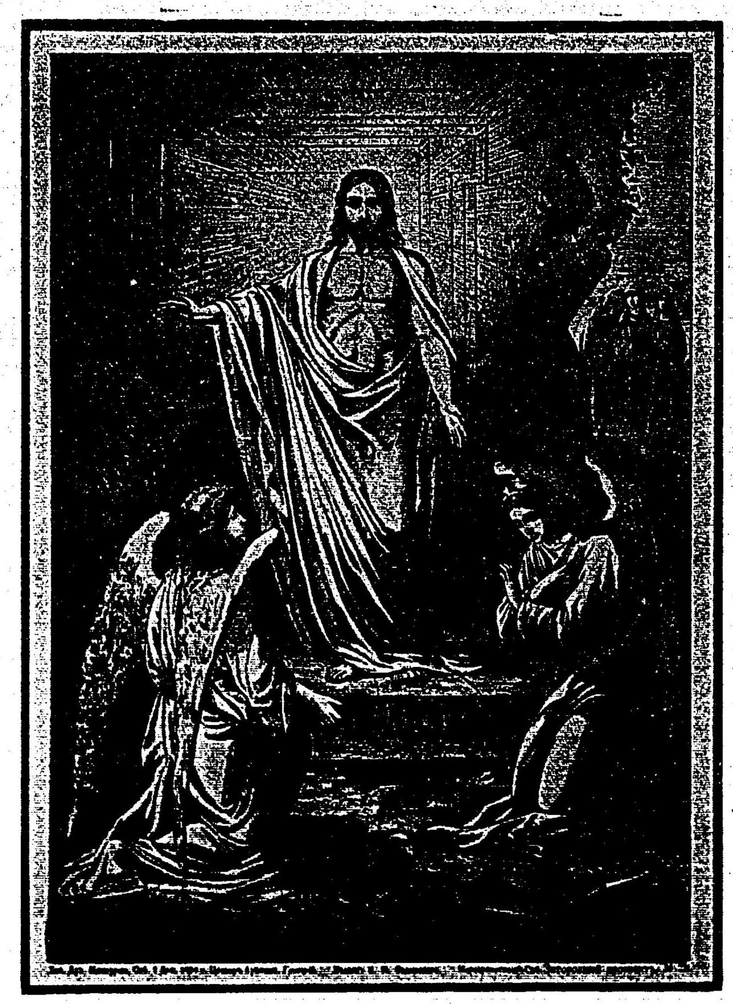
【第三日に聖書に應ふて復活し】（信經の五）

主イヽスヽハリストスの苦みと死は、我らを救ふものであるといふたしかなしるしは、その光明なる復活に在ります。主の復活は、又我らが末日に福なる復活を享る第一の明しで（十五の廿、前）あります。彼は其十字架に死んでから三日目（即ち今の日曜日）に於て實に復活されました。それは無論人の性です、上帝の性は死ぬることがないから又生き出ることもない。而して一旦死んだ人の性はこの上帝の性に依て復活したのです。彼は確に死んで葬られ其墓は嚴重に敵の兵隊を以て警護をされたにもかゝはらず一旦死んだものが三日目に生き出たのは實にふしぎであります、このような大奇蹟は、もとより上帝の性の力に依らなければ行はれません。

主イヽスヽハリストスの一生涯は、何一つも偶然に起たとはありません。皆其

前に預言が有て、幾百年若くは幾千年前に上帝は預言者の口を以て、又は或事件を以て示されてあります。此大なる復活については、預言者イオシヤは明かに『二日の後の復活、即ち三日目の復活……』てふ言を傳へ、（イオシヤ六の二）預言者イオナは自分が三日三夜大魚の腹中に在たことを以て（イオナ一の十七）ハリストスの驚くべき事蹟を象ッてをります。

次の繪は三日目の未明前に天使が降て墓の蓋石を取るとハリストスは直に復活して立ち給ふた光り輝くありさまを象ったものであります。その遙かに見えるのは、マグダラのマリヤ其他の携膏女が來る所です。



ハリストスの復活

第六回、主の昇天。

『天に昇り父の右に坐し、』（信經の六）

驚くべき復活を以て死の權と地獄を打破った主イエスキリストは王として、凱旋の王としてその人の性を以て天に昇られました。それは復活後四十日目に於てエレオン山から昇られました。聖書に主が天に昇りたまふたことを謂て『降りし者は彼れすなはち諸天の上に昇りし者なり、これ萬有を充たさんがためなり』としるしてあります。（エフエス四の十、）又主が威嚴なる父の右に坐し給ふことを謂て『我らに斯くの如き司祭長あり、彼は天に於て威嚴の寶座の右に坐せり』としるしてあります。（ヘブレイ八の一、）

主が天に昇り給ふたのは、何の爲であるかと申すに、ちょうど、その前に死より復活して人人の爲に復活のはじめをなし給ふた如く、今度は人の性をもって天に昇って人人のために天國に入るの門を開いてくださったのであります。（アイオ

十四の二、三、エフエス二の六、其他。）故に聖使徒は彼を「我らの天に昇る前驅」と稱してゐます。（エサレイ六の廿）

上帝は在らざる所なき者であるのに、主が上帝の右に坐し給ふといふのは、如何いふ意味であるかと申すに、これは主イヽス、ハリストスが上帝父と同樣の權能と光榮を有ち給ふようになったことであります。

主の昇天

第七回、審判者としての主イヽスヽハリストのこと、

「光榮を顯はして生ける者と死せし者を審判する爲に復來り其國終りなからんを。」（信經の七、）

罪人に悔改の猶豫を與へてこれを救ひに招くところの上帝救世主は、決して何時までもそのまゝに棄置くことは致されません。相當に長い猶豫の期限も切れて上帝の定め給ふた時になれば、彼は人人の悔いたか悔いないかを調べ信仰が有たか無いか行ひはどうあッたかといふことを一一御覽になッて、それらに相當の裁判を下されます。この裁判には二通りあッて一つを私審判といひ、一つを公審判と申します。私審判とは人が一人死ぬると只その一人のたましひについて行はるゝ裁判で、人の身の終りに在ります。公審判とは全世界の悉くの人類のたましひとからだを合せて一時に行はるゝ裁判でこの世界の終りに在りま

す。

前條に申した主が天に昇りたまふ時、そこに立て見て居た御門徒がたに向つて天使が『此はイヽスヽが汝らに別れて天に昇るのである、汝らはこの通り天に昇るのを見たに由て後亦この通りおいでになる』と申されたとがありましたが、（行實の十一）この終りの言は、即ち主が世界の終りに再びおいでになることをさしたのであります。

上帝の裁判は、極めて公平で極めて嚴重で一點のまちがひもありません。曾に行ひに顯はれたとばかりでなく言ばかりでなく心の底に思ふたことまで一一その善惡に因て賞罰を行はるゝとであるから、正しい人のためにはよいけれども惡い者のためにはまことにおそろしいとであります。而して生前に悔いて罪過を赦されたものはこの審判に由て天國に昇り永遠の福を享け、罪を悔いずに死んだものはもちろん赦されるはずもないから地獄に下りはげしい苦みを受けなければなりません。

愈その時が來れば、今までの救世主は、儼かなる審判者としておはせいの聖なる天使らを從へてこの世界に臨み、人種と時代と貴賤貧富の別なく、悉くこれを裁判して義人を永遠の上帝の國に入れられます。他の惡人は自ら永遠の火に入らねばならぬ。惡人は、そのときになってから俄かにいくら悔いても泣いても追付かない、そこで今の中にはやく悔いて上帝の救ひを戴くように用意しなければなりません。（マトフェイ福音廿五の廿四……）

その時が近づくと惡魔は死物狂ひになっていよ〳〵暴れ廻るそうですけれどもおごそかなる主イヽスヽハリストスの御降臨にあへば一瞬間に打滅ぼされて、あとは幽暗の火の淵に限りなく苦ひばかりです。どうか我らはこのような惡魔とその運命を共にしたくないものです。（マトフェイ廿五の四十一、其他）

『ハリストスの國』とは、普通この世界と教會と天國のことを申しますが、こゝに『そ

の國終りなからん』とは、天國殊に公審判後大に開かるゝ『光榮の國』のことであります。（ルカ一の卅三）此れはなほ卷末に、も少し詳く申述べましやう。

罪人が一旦死んでからは、自力で如何もすることはできないけれども、生きてをる信者は、死んだ者の爲に施濟をなし及び彼らに代って祈禱を上つり、教會の神父に願ふて彼らのために無血祭（聖體機密）をさゝげることに依て、彼らのたましひに助けを與ふることができます。もっともこれは信者にかゝはることで、彼の上帝を信せず救世主をみとめない異教人については、敢て教會から如何することもできません。故に苟も自分のたましひの平安と危害を慮る人は、公審判以前に、否自分の死なぬ前にはやくハリストスの福音をきいて上帝と教會に頼んでおくのが安全の策であります。

次の繪の上にはるかに見えるのは、公義なる上帝、全世界の審判者で、其下の左の方に投げられ又は陷りつゝあるのは、不信不悔の罪人が地獄に落るありさま。其右から上の方にかすかに昇りつゝあるのは、罪を赦された義人らが天國に昇りつゝあるありさまを象ったところであります。昔ロシヤの大侯ウラヂミルは（第四章三回の一件を參看。）グレチャの博士から教を聽き公審判の圖を示されて大に感じつゝ『あゝ此右に立つ善人は福である、左にある惡人は禍である』と曰て覺えず歎息されましたから、博士はこれに向って『あなたが若此右に立つ者と天國に往きたいならば悔改して洗禮をお領なさるが宜しい』と申しました。その後大侯はついに洗禮をうけてりっぱな信者となったのみならずついに聖人となられました。

世界の末日審判の狀

〔第四章〕上帝は成聖者たること。

第一回、上帝聖神のこと。

『又信ず、聖神主、生命を施すもの父より出で、父及び子と共に拜まれ讃められ、預言者を以て嘗て言ひしを』。（信經の八）

前回に申したような おそろしい上帝の審判を免れて永遠の救ひをうけるのには、先づ我らも聖なる者とあらねばならぬ。それをなすには我らが自由を上帝に向けて篤くこれを信仰して頼むことにあります。けれども、我ら罪人は、もはや罪に由ていたく弱ッてあります、とても自分の力ばかりではその上帝を信仰する心さへ起すことができません。どうして我らが聖なる者となることができましやうか、とても我らは弱り果てた人間として できません。そこで成聖者たる上帝聖神がなくては なりません。これがために上帝聖神は主の復活後五十日目に上帝父から、聖使徒と敬虔なる門徒に降りました。すなはちイェルサリムの聖なる高

堂に於て火の舌の形を以て彼らに臨みました。（行實二の一から四まで）それから今も聖神は教會に在てこれを護り聖機密に於て多くの信者に降り彼らに成聖の恩寵と力をお授けになります。眞實の信者であれば、熱切の祈禱と機密に依て必ず聖神の親みを感ずべきです、聖使徒は此とを謂て『汝らは豈知らずや、汝らは上帝の殿にして上帝の神汝らの中に居ることを』と申してゐます。（コリンフ前三の十六）

聖神の恩賜の中、普通にしても緊要なる恩寵は七つあります。それは明知、聰慧、謀畧、勇毅、超識、虔誠、敬畏で、預言者イザイヤの算へたところであります。（イザイヤ十一、二、三）

第二回、教會のこと、

『又信ず、一つの聖なる公なる使徒の教會を』。（信經の九）

教會とは主上帝を信ずる民の團體で、牧者と信者の二つから成立てをります。

斯の教會を立てたものは、惟一の上帝で主イヽス、ハリストスは教會の首長であれば、教會は即ち主イヽス、ハリストスの身體であります。故に眞の教會は惟一つでなくてはなりません。（コリンフ前三の十、十一）

眞の教會には上帝聖神が臨在になって、其聖なる恩寵の寶藏であります。（エフエス五の廿六、廿七、イオアン十七の十七）たとひ如何な罪人でも痛悔して罪の淨めを願ふ者には、教會の聖機密を以て彼らを聖なる者とすることができます、故に教會は恒に聖なることを失ひません。

ハリストスの教會は、何れの世何れの民にも行はるべき一般の公教會で

あります。聖書に『福音は全世界に弘まり且つ果を結び成長する』といふことを（コロスイの五、六）申してある通り、實に今や全世界に弘まってゐます。

斯教會は、上帝から直接に選ばれた使徒の教と傳を守って立ったものであります、故に又これを使徒の教會と申します。（フエサロニカ後二の十五、參考。）

眞なるヘリストスの教會、すなはち我が正教會はそのはじめイウデヤの首府イエルサリムに於て基を置かれました。そこでかの諸聖人といと福なる者の集りなる天の教會のことを聖書に『天のイエルサリム』と名づけられてあります。（エヴレイ十二の廿二）

我ら上帝を信ずるものは、又上帝の教會を信じて、その導きに從ひよくその規則を守らねばなりません。主イヽスヽハリストスが聖使徒にをしへられたお言に『若し教會にも聽かずば、汝のためには異邦人と稅吏の如くなるべし』と仰せられてあります。（マトフエイ十八の十七、）

第三回、七件機密のこと。

『我認む、一つの洗禮以て罪の赦しを得るを。』（信經の十）、

教會には信者を聖なる者とする爲に機密といふものがあります。機密とは、救ひの能力たる上帝の恩寵を人に授ける聖なる禮法であります。洗禮は即ちこの機密の門で、それから奥までで都合七つあります。それは、洗禮と傅膏、聖體、痛悔、神品、婚配と聖傅の七つであります。

第一件、洗禮機密のこと。

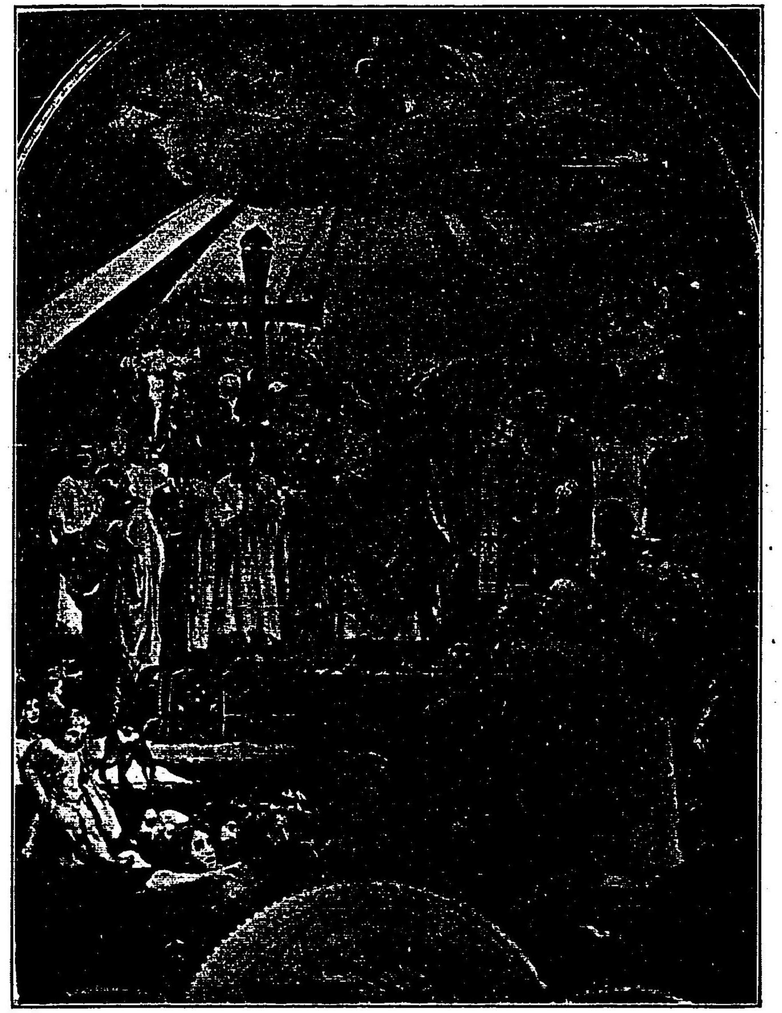
洗禮とは、これを領ける者が、信仰と悔改の心を以て父と子と聖神の名に依て三次水の中に沈むことに由て原罪と自作一切の罪を赦される機密で眞にたましひの更生です。すべての機密は敎會の聖なる牧者すなはち主教若くは司祭でなくては行ふことができませんけれども、洗禮に限り危篤なる病人に對する如き已むを得ない場合に於ては、普通の信者でも行ふことを許されてあります。

幼兒は自分で信仰を表すことができません けれども、此は代父代母の信仰に依て授けることができます。我らの母たる教會は、いと微さな小兒の一人でも惠みの洗禮を領けずに滅びの暗路に往くことを願はないからであります。

洗禮はたましひの生れであるから一生に一を限りであります。

人は洗禮をうけて信者になれば、上帝から特別に守護天使を降して彼を守られます。（十一頁の前の挿繪を看よ。）

次の繪は、かのロシヤにはじめて正教を公に入れたところの聖ウラヂミル大侯の勸めに因てキエフの民がドチプル河に於てグレチャの主教から洗禮をうけてをるところであります。時はハリストスの降生九百八十八年でした。多數の人が老幼男女の別なく早く洗禮をうけたいと望んで群がるありさま、ウラヂミル大侯とその一家族、及び主教と諸神品、教役者が河岸に立て祈禱するねごそかなありさまは、別に説明をまたずして圖につまびらかです。この盛大なる出來事に大侯は、よろこび極まって兩手を擧げ天を仰きつゝ、聲を揚げて『天地の造主や、この新なる子に祝福せよ、彼らに爾まことの上帝を知らしめ、彼らに正しき信仰を固め、我を罪の誘ひより守りたまへ。我は汝の聖なる名を讃揚げん』と祈られました。圖の上部に遙かに見えるのは、この時天に於ての喜びのようすを象ったものであります。



洗領の民フエキ

第二件、傅膏機密のこと。

傅膏とは、聖神の恩寵を象る聖なる膏を領洗者の額と胸其他の部分に傅けてたましひの生命を丈夫にする機密であります。この機密がたましひの内における作用について、聖使徒パウロは「我らを汝らとともにハリストスに堅め、及び我らに膏つけしものは上帝なり彼は我らに印を捺し神の聘質を我らの心に與へたり」と申してゐます。(コリンフ後一の廿一、廿二)

傅膏は洗禮についで直に行はれます。この機密も洗禮のように一生に一度限りのものであります。

第三件、聖體機密のこと。

聖體は機密中の機密とも申すべき畏るべき大切なものであります、それは我らが罪の赦しと永遠の生命を享ける ためにパンと葡萄酒を以て主イヽスヽハリストスの眞實の聖體と聖血を領て食る機密であるからです。

主イエス、ハリストスは、その苦みを受ける前の夜、手づからパンを裂き杯を取て御自分で確かにその体と血であることを明言せられ且つ聖使徒らに毎にこの機密を行ふことを命ぜられました。（ルカ廿二の十九、廿、其他。）

聖體機密は教會の奉事中最も重大で緊要の部分をなすものです、故に我が國では奉事（リトルギヤ）のことを聖體禮儀と申されてゐます。

主教若くは司祭が定例の祈禱と禮法をなすことに由て祭臺の上なるパンは實にハリストスの肉となり葡萄酒はハリストスの血となります。この驚くべき變化は、無論上帝聖神の作用に因て成るのであります。ちょうど至聖なる童女から聖神に因て上帝の子が生れたような ものです。

我らは何故上帝の子の聖體聖血を戴かなければ永遠の生命を得られぬかと申せば、先づ我らは罪に依てたましひもからだも痛く弱り果たことを思ふべきです。弱り果た病人はからだに元氣をつける ために藥の外にも肉食したり牛乳を飲んだりなぜ致さねば、なかなか丈夫になれない。今たましひの大病人たる早晩朽果るべき肉体を持てをる我ら罪人は、とてもこのまゝに生命の國に入らるべきものでない。そこでいと尊い主の聖體を以て我らのたましひを丈夫にしいとありがたい主の聖血を以て我らを眞の生命に進むように養活ふていたゞくのです。

斯ような たそるべきありがたい機密であれば、我らがこれを領けるのには、充分に痛悔して良心の儆醒と齋と祈禱を以て準備しなければなりません。

斯機密は、我らが痛悔して適當の準備さへすれば一生の中に幾回でも領けることができます。先づ教會の規定に依れば一年に一回以上四回以下痛悔して領聖すべきです。

次に掲げた聖體機密の圖は、おぢそかなる斯禮儀に於て主イエス、ハリストスが十二使徒にこの至尊至聖の恩賜をおさづけになるようすを象た

ものである、といふことは、皆さん一見してお分りでしやうが、その兩端に扉然と立てをるのは、ヘルワイムで、今にも教會でこのいと畏るべき機密の行はるゝときは、上帝の尊き天使ヘルワイムなどが聖なる祭臺に近く見えずして侍立つて事まつることを我らに悟らせるものです。

救世主が諸門徒に聖體機密を授け給ふ圖

第四件、痛悔機密のこと。

痛悔とは、信者が洗禮後復犯した罪を赦される機密で、信者は自分の罪を認めて神父にそれを正直に申述べ神父から赦しのお言を戴くと、主イエス、キリストは我らの目に見えずにそこにおいでになって其罪を釋してくださるのであります。

主イエス、キリストは人の罪を釋すと否との權をたしかにその聖使徒に與へられました。その御言に『汝らが人に其罪を釋さば則ち釋され、人に其罪を留めば則ち留められる』と仰せられてあります。（イオアン廿の廿三、廿）この權は聖使徒から其相續者たる主教につたはり、主教から又司祭に與へられて今に弘く行はれてあります。

我らは道德上には極めて弱いもので只の一日たりとも罪過を作さずに立て行くことはできません。故に教會は年に四期の齋を定めてその間に痛悔することを

信者に勧め諭してあります。故に我らはいくら忙しくとも少くも年に一度の痛悔機密を傾けて自分を一年中の罪汚れから浄めなくてはなりません。

痛悔に必要な準備はよく自分の良心に省みることと齋と祈禱であります。

次の絵は、昔しイズライリの王なるダヴィッドが大罪を犯して後非常に悔て哭て祈禱してをるところです。彼は前に人を大變いためて上帝の前に非常な大罪を犯したのでしたが、上帝の預言者ナタンが來ていたくこれを責めました。そこで彼は大に痛悔の心を起しました。けれども何分容易ならぬ大罪のことでしたから彼れの家には大に悲むべき災難が臨みました。ダヴィッドが罪に因て生んだ嬰兒は、預言者ナタンが歸った後劇しい病氣にかゝって生命も甚だ危いようすでした。ダヴィッドは ます〳〵己が罪を悔いて斷食して終夜闘に描てあるとおり地面に俯伏て嬰兒の爲に祈りました。けれども嬰兒は七日目についに死にました。彼は上帝の旨のあるところをさとって

（サムイル後十二の十五から十九まで。）いよ〳〵謙遜して丹心からの痛悔を以て上帝の憐みを願ひましたから、上帝はついに彼れの罪を釋して福な人となされました、彼れの作った第五十の聖詠は、古から信者が痛悔の手本として數會に用ひられてあります。

ダビッドの痛悔

第五件。神品機密の、と。

神品とは、教會を つかさどる 聖なる 役者で、この 機密を 行ふ 權は 只 主教に 屬して をります。教會の 規則に 從て 神品と なるのに 適當な もの は、主教 の 手撫の禮を 以て 神品 機密を 行はれ、乃ち 立てられて 司祭と なり 信者の 群を 牧する と になるの です。

神品の 一ばん 始めは、ヘリストスが 直接に 撰ばれた 聖使徒で、聖使徒の 相續者は すなはち 主教で あり ます。聖使徒の 言に『人は 我らを 視て ヘリストスの 役者、上帝の 機密の つかさ と なすべし』と 申して ゐます。(四の一、コリンフ前)

正教會で 神品の 階級は 三つ あります、――主教と 司祭と 輔祭 で あります。

――主教は 教會で 一ばん 尊い 監督者で 一切の 機密と 聖務を 行ふ 權を もって をります。而して 昔からの 傳へに 依て 主教は 皆 修道士(無妻の 行者)です。司祭は、主教の 認可に 依て 規則に 許された だけの 機密と 聖務を 行ひます。輔祭は、只 司祭の

行事を助けて祈禱と聖務の時役事を致します。

第六件、婚配機密のこと。

婚配機密とは夫婦の縁組をなす男女が、互に自由の承諾と生涯の貞操を守ることを教會の前に約束して、司祭はその配耦を祝福し祈禱をもって主上帝の恩寵は彼に降って互に助けて救ひの道に進むこと及び小兒を敬虔の教に養育することを致させる聖なる禮法であります。

婚配のはじまりは、世界のはじめに上帝が一人の男と一人の女をお造りになってこれを祝福されたことにあります。而して新約の教會は、いよ〳〵明かに一夫一婦の正道を固めてをります。かの一夫多妻とか一人の婦が二人以上の男をもつとかいふのは、甚だ宜しくないことであります。

第七件、聖傅機密のこと。

聖傅機密とは、聖なる油を病人の額其他につけて上帝の恩寵を祈り以て彼れの罪を赦し又本人の信仰と上帝の聖旨に依れば身体の病氣をもなほされる機密であります。

聖使徒は、主イエスキリストから權をうけて初めて此の機密を行ひ(マルの十六三)且つ其他の役者に傳へました。それは使徒イアコフの公書(五の十四、十五、十六)に詳であります。

〔第五章〕上帝は成全者たること。

第一回、人間の成全——復活のこと。

『我望む死者の復活』（信經の十一）

至ッて仁慈にして光榮なる上帝は、その仁慈と光榮のために世界を造り、造物主として人に存在と自由を與へ、救世主として罪人に救ひの道を立て、成聖者として彼らに聖とならるべき恩寵をたまひ、審判者として彼らがこの恩寵を如何に用ひたかをみとなはし、終に成全者として一個人の終りと全世界の最後に於て充分にみことに預定をほり成就したまふことであります。

我ら一個人の終りについては、死ぬることであるといふことはみなさんよくどんどですが、この死んだからだは、くさってなくなってそのまゝかといへば、決して、そうでない。たしかに復活出ることがある。すなはち茲にいふ「死者の復活」と

は、死んだ人のからだが再びそのたましひと合ふて、もとの通り活きた人となることを申します。これはもちろん上帝の全能の作用に依ることです故、死骸は、いくら土になつてゐても灰になつてゐても海の中に溺れてゐても、復活するにすこしも差支はない。

世界中のおほせいの人は、皆死んで、皆復活すべきものであります、けれども上帝の定められた復活の時にまだ生のこつてゐるものは、死ぬる暇もなくそのまゝ變化して復活体となります、これも固り上帝の大なる力に因ることであります。

其ような出來事は、何時であるかと申すに、この世界の終りであります。その時世界中の悉くの人間は、皆復活して（その中幾分は變化して）上帝の前に出て審判を受けます。この審判のことについては、信經の順序に依て前第三章の第七回に述べましたから茲には申しません。

但その復活は、善人も惡人も、信者も不信者も皆共にあることで、もはや又死ぬることのない身体になるのですけれども、善人ばかりが至極善美な神靈的身体に復活するので、惡人も復活だけはするものゝ、只罰を受けて苦むばかりの身体ですから惡人のためには、どてもさいはひであります。

斯の通り全世界の終りに復活があつて、人は善惡ともに充分の應報をうけるのです。それまでは、善人のさいはひも、只たましひにばかり、惡人のわざはひも靈にだけで、からだには何のともなかつたのでしたが、茲に至つてどちらも完全に賞罰が行はれます。

第二回、全世界の成全、——光榮の國が開かれること。

『並びに來世の生命を。アミン。』（信經の十二）

茲にいふ來世の生命とは、復活と公審判がすんでから後の生命です、斯世界も終り、斯世の教會も終つて、只天の教會すなはち『光榮の國』が開かれて、所

天國に進行

謂「その國は終りなき」永遠の生命、永遠の幸福なる生命です。

世々の教會に輝く聖人と義人が、この時「父の國に於て日の如く輝く」その光榮は果して如何ようであるか（マトフエイ十三、四十三）凡そハリストス上天國帝を恃んで罪の赦しを受けたものが、父の祝福を得て上帝の實坐に近く至聖三者に拜謁し進行て心は清く愈〻善に進み愈〻大に知識を開かれるその幸福は如何あるか（コリンフ前十二、參考。）我らは今言にどころか心に想像することもできません。

光榮の國に於ける義人等の幸福は、生前の功勞の多いと少いに因て區別あることは、當然の道理ですが、併し其幸福の永遠なることは、皆同じで各自この上なき滿足を感ずることであります。

斯の通り上帝の預定された義人は、皆天國に入り、これまで罪惡の爲に壞傷られた物質世界はすっかり新しく改められてすこしのきずもなくみじんの惡もなき奇麗な新天新地となって至愛の主イヽス、ハリストスは、その父と聖神とともにこの光榮の國に光榮の王としてそのいつくしみは永遠にかゞやき、我ら罪人も聖なる者となって多くの聖致命者と克肖者と一般の聖人らとのみならず聖なる天使とヘルヲイム、セラフイムと共に三位一性の上帝を永遠に讃美するようになるのは、實に上帝成全者の大能と大恩に因ることで、實に我らは折角人間と生れては、ついにどうでもこのような境に至らなければなりません。

斯の反對にも永遠の境がある、すなはち永遠の滅び――惡魔と其使とともに永遠の火に焚かるゝ地獄である。これには如何なものが往くかと申すに上帝

を信せず贖罪を認めずして徒らに不正不悔を以てこの世を過した人である。主イヽスヽハリストスのお言に「此らのものは、永遠の苦みに往き、義人らは永遠の生命に往く」と仰せられてをる通りです。（マトフエイ廿五の四十六）あヽ永遠の生命こそ眞の生命である眞の生命を享ける者こそ眞の人である眞の上帝の教なる正教は確に此とを教へて居ます。

此前の挿繪は、聖致命女エカテリナ、ワルワラ、其他の諸聖人が天使に携へられて天國に進むありさまを象った所で、キエフの聖大侯ウラヂミル聖堂のてんじょうに接した周圍の壁にちょうどパノラマのようにぐるっと續けて描いてあるその一部分を寫したのであります。

願くは、我らは、全能至愛の主に依て今も靈魂は罪に因る死より復活し終に光榮の國の末坐になりとも永遠の生命を享くるを得んとを。アミン。

繪入正教大意　前編　終。

上帝救世主

明治卅四年十二月廿五日印刷
仝卅五年一月二日發行

（實價金拾錢）

著作者兼發行者　東京府北豐島郡瀧野川村八十六番地　水島行楊

印刷者　東京市神田區淡路町一丁目一番地　神田靜次郎

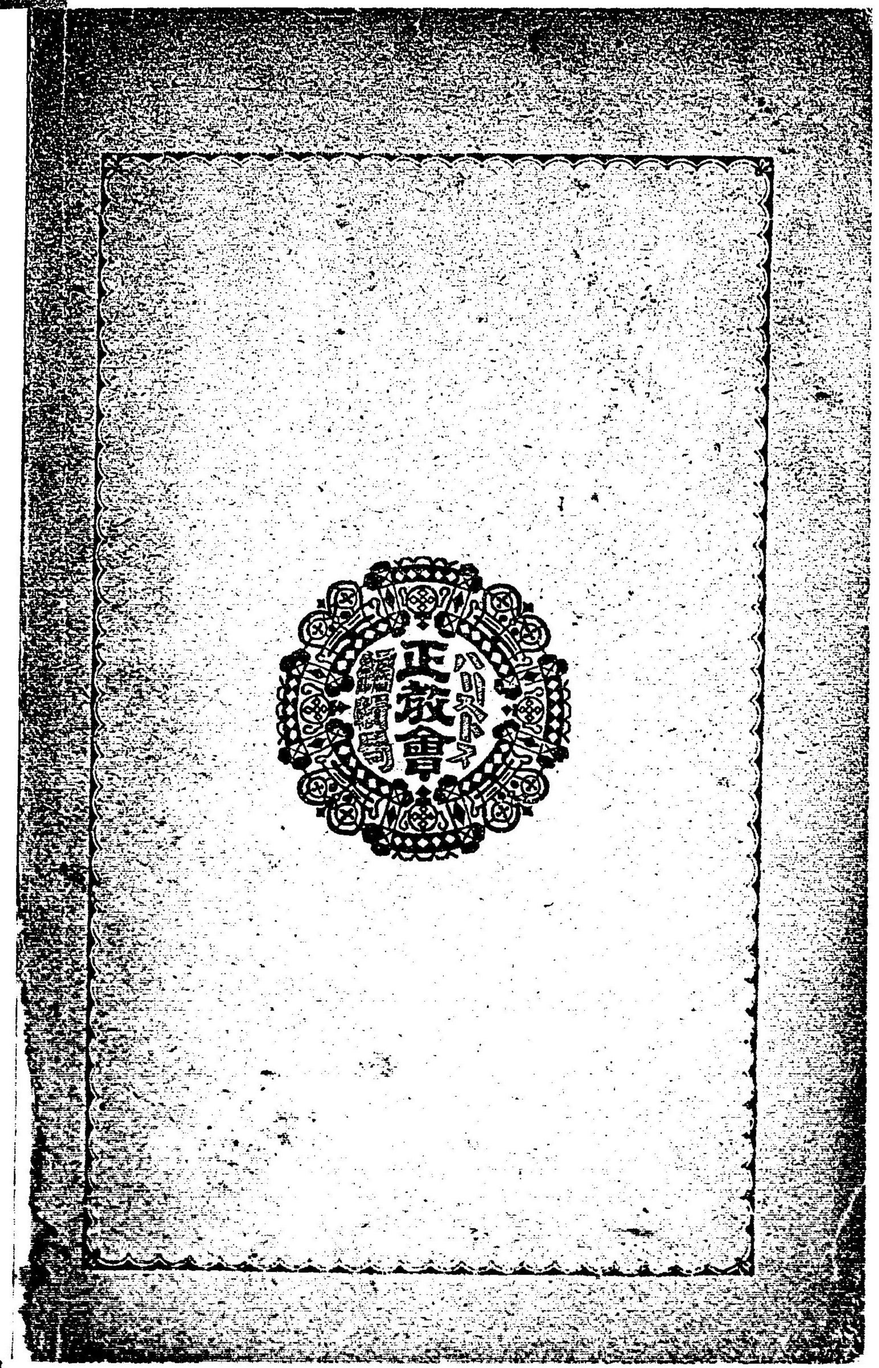
印刷所　東京市神田區仲猿樂町四番地　日本印刷株式會社

出版所　東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地　正教會編輯局

新刊■正教に來れ■口繪入　全一冊讀切……實價金二錢。郵稅四冊まで一錢。
再版■聽教の勸め■口繪入……實價金二錢。郵稅三冊まで一錢。
新刊■先祖の神■口繪入……實價金二錢。郵稅五冊まで一錢。

最新刊■福音の勸め■口繪五枚入……實價金六錢。郵稅三冊まで四錢。
以上目下我が國の現狀に應じて最も必要なる、且つ讀者に清快の趣味を與ふる小冊子なり。信者不信者共に僅かな費用を以て遠大なる利益を得べし。

221
112


ハリストス正教會
編輯局

特18
694

絵入りハリストス正教大意
前編

国立国会図書館

020277-001-2

特18-694

絵入ハリストス正教大意

水島　行楊/編

1冊(76)

M35-40

ABI-0082